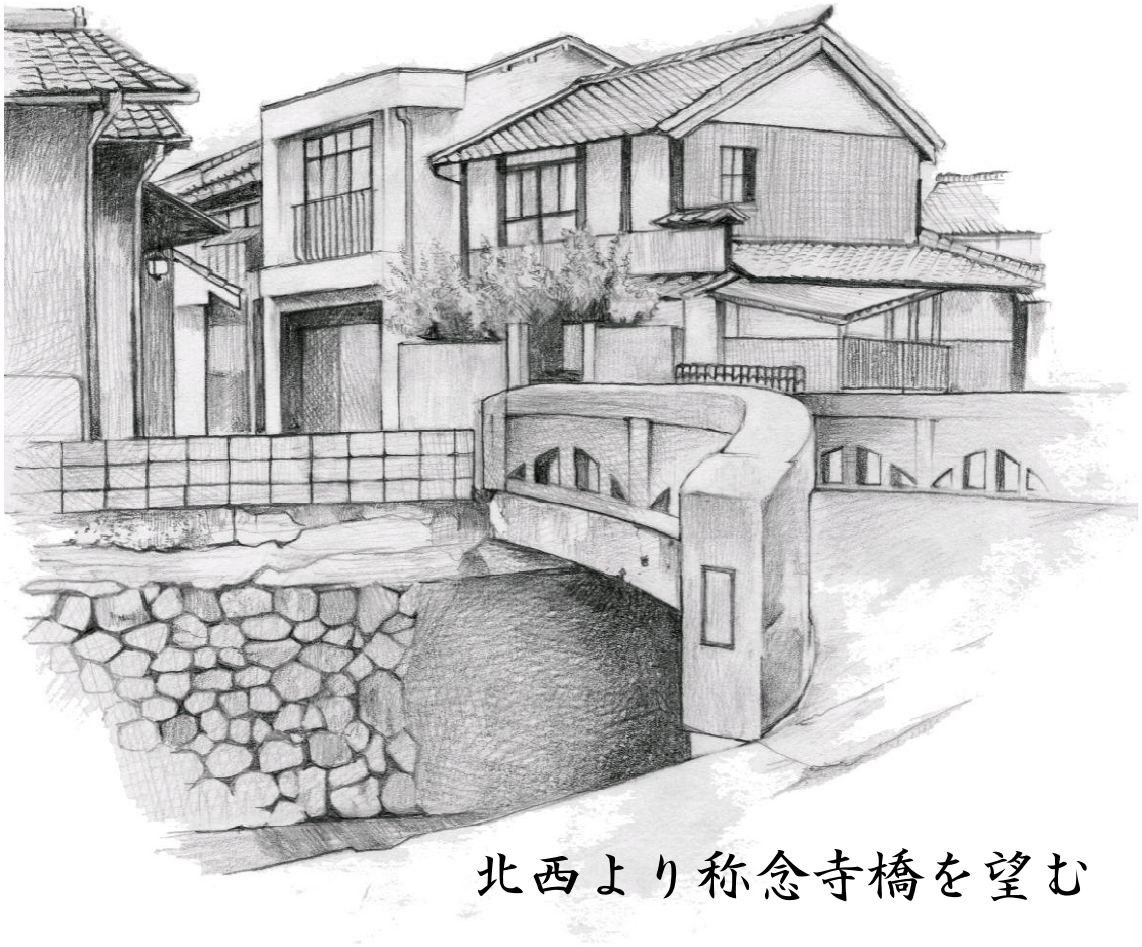
かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314



北西より称念寺橋を望む

をやの思いを にをいがけ、

内治(うちうち)に心を配り おたすけに誠の心を尽くそう

1．一歩前進 百万軒
2．おつとめの徹底と ひのきしん
3．機を逃さず おさづけの取次

立教百六十八年の
初春のお慶びを申し上げます

昨年は大変御苦労様でした。教祖年祭活動の二年目という事で一年目に増してより勇んで三つの実践項目の実動に力を注いでまいりました。お陰で十一月二十八日の別席伏せ込みひのきしん団参には千名を越える方に参加して頂き、大変勇む事ができました。改めて皆様の御丹精の賜と御礼申し上げます。しかしながら一方では「ぢしんをふかぜ水つき」等の天災によって多くの方が被災されました。誠に痛ましい事であります。「これわ月日のざねんりいふく」とお聞かせ頂きますが、大自然の営みの中に生かされている事を忘れ、我身勝手に生きようとする全ての人に対する警鐘と思案できます。そして、十年前と昨年とちょうど年祭の旬に起こった事を考えますと、よふぼくの成人の鈍さに対するものと思案する事も出来ます。というよりむしろそう思わせて頂かなければならないと思います。

さて本年は年祭活動の仕上げの年であります。よふぼくの成人が求められているこの旬に何としてでも親の思いに応えて行かなければなりません。確かに昨年までは実動する事が目的であったように思います。しかし、親の思いが届いてこそ実動の意味があるならば、実動によって実を上げる必要があります。その為に本年は「全教会一名以上の初席者を御守護頂こう」を申し合わさせて頂きました。一名でよいのではなく一名以上であります。その為にはよふぼく一人一人が洩れなく初席者一名を御守護頂く心定めをしなければ実現致しません。求められているのは教会の成人ではなく、全てのよふぼくの成人であります。仕上げの年に相応しい成人めざし力の限り勤め切らせて頂きましょう。

笠岡大教会長
上原理一

表紙のことば

昨年、本誌の表紙は、初代様の遺品を掲載させていただきましたが、本年は、上原元子さん(大教会長様の長女)が、初代様縁の地のデッサン画で飾ってくださることになりました。

称念寺橋袂浜側東詰二軒目――。

笠岡大教会初代会長・上原さとが、舅姑・上原佐吉・八重の元へ身を寄せた明治十九年六月、佐吉、八重、さとの長女・光が暮らしていた借家である。

取材の為、吉岡輝昭さん、上原元子さんと、暮れの十二月二十九日現地に佇んだ。曇り空で冷たい風が肌を刺す――、そんな日だった。初代が大阪・二軒茶屋の住まいを引き払って堅い決心のもと笠岡へ帰って来たのは六月だった。梅雨時分多少肌寒い頃だったのだろうか。この橋の下を流れる隅田川の水嵩も毎日の雨で増していたかもしれない。その日、雨が時折パラついていたかとも思う。

初代は帰るや、翌日姑・八重の出直しを看取っている。いかに堅い決心のもとの帰郷とはいえ、悲しかったであろう。「木から落ちた猿」という言葉がある。最近の猿は路上でも悪戯をするが、猿は樹にあってこそ本領を発揮する。備後屋佐助――通称「備佐」は、大阪で屈指の畳表問屋であった。その大店の御寮はんも、この時は「木から落ちた猿」であった。まさに上原家のどん底だった。初代は生活の為、小間物屋を営みながら上原家の来し方を振り返り、遺された年寄・佐吉と幼子・光(当時七歳)を見ながら、万感胸に迫る思いがあっただろう。そしてその中、じっと親神様の思惑の現れを待っていたと思う。お言葉に「落ちきった水は上がるよりない」とお聞かせ頂く。

葬式、その後の片付けと人々は遠慮していたが、一週間程して旧知の神保マンさんが挨拶に来た。世間話の後、帰る間際となって、初代が尋ねた。「正兵衛さん達者かな?」マンさんはその一言で目に涙を浮かべて主人の正兵衛が持病の腹痛で困じ果てている事を話した。初代は即座にマンさんに御供(ごく)を与えた。「帰って正兵衛さんに頂かしなはれ。私はここで教祖にお願いしとくから」

神保さんは誠に鮮やかな御守護を頂いた。あまりに鮮やかだったので、噂は口から口へと伝わり、お助けを願ってくる者が後を絶たなかった。上原家では小間物屋に手が回り兼ね、店番の光は「お母はんおらんから、お代、適当に置いて行って」と言うのが常だったという。初代は連日早朝から夜遅くまでおたすけに、笠岡の町内は言うに及ばず近在の村々――金浦、吉浜、茂平、有田、追分、富岡、横島――を周り、席の温まる間もなかった。笠岡大教会の道あけである。

よく父親が話していた。「機会、チャンスというものは、前髪しかあらへん。通り過ぎてからは、どもならへん。」

初代は、見事にガッチリと親神様の思惑(チャンス)をしっかりと手中にした。初代は上原家のどん底で、世界救けの一条の道があかあかと見えたに違いない。

私は年を経てずいぶんと変わったであろう称念寺橋の姿とその周辺を見ながら、金浦、吉浜をはじめ広島県境の村々に近く、また笠岡町内をはじめ町の東、北の村々にも道が通じているこの場所は、お助けの拠点として格好の場所だったのではと思った。

「笠岡は歩いて歩いてついた道」初代の言葉である。

(史料部長　上原繁道)

世話人神殿講話（十二月月次祭）

元を振り返り 救け一条の心定めを

島村廣義先生

過去二年を振り返って

教祖百二十年祭三年千日活動第一年目の昨年は、本部巡教・地方講習会をもってよふぼく一人ひとりに諭達の趣旨徹底が図られました。

その思召を体して、二年目に入り、先ずはそのをやの思いを聞いて、教会長・先達よふぼくは、如何に通るのかということで、先達大会が開かれ、実動にかかりました。

しかし、「教祖百二十年祭」ということで実際にその動きができてきたかと考えると、燃え上がるような感触が今一つ感じられませんでした。

全教の動きからそう感じられるが故に、十月、配偶者・役員同道で本部直属教会長をおぢばに集めたおやさと集会で、両統領からいろいろとお仕込みを頂戴しました。

皆さん方も、一年目から二年目に続いて通り越してきた日々を振り返られ、三年目に向かう最後の年を迎えるに相応しい二年目の通り方であったかどうかご反省いただきたい。

年祭の意義

思い返せば、教祖百年祭をつとめ終えて後、道の動きが決まる上で責ある立場の本部員・直属大教会長・教区長に対して、真柱様から、次の百十年祭をつとめるかどうか問いかけられました。

教祖の年祭をつとめる元一日は、子供の成人を思われる御親心から教祖が現身を隠されたという一点にあります。

ですから、教祖の年祭は、旬が来たからするというものではなく、年限仕切って何が何でも思し召される成人の実を上げて教祖にお喜びいただこう、姿を隠されてまで成人を急き込まれた親心にしっかり応えようと、私たちの側からのどうでもこうでもつとめずにはおれないという心からつとめるものです。

真柱様のお問いかけに対して、改めて私たちの側から、是非ともどうでもこうでもおつとめいただきたいと願うて百十年祭をつとめたわけです。

教祖百十年祭後の道程
――百二十年祭を迎える環境

この教祖百十年祭をつとめて後、教祖のご誕生二百年という節目を過ごし、真柱の理が三代から現真柱様へと引き継がれました。

道の若きをやを戴き、一手一つの前進・よふぼくの奮起を促されて、新たなたすけ一条の門出をしました。

その中に、かんろだいの事情という節を見せられ、ぢば・親神様に対する信仰姿勢を厳しく親神様の方から私たちに問いかけられました。

また、前真柱様の奥様のお出直しという節をも見せられました。

この道の上に見せられた大きな節と、世の中に見せられた大きな事情(阪神大震災、世界各地に起こったいろいろな争い事)との立て合いの中に、教祖百二十年祭が打ち出されるということになります。

教祖百二十年祭は正しくその三年千日、おたすけということを促されています。

おたすけの心の涵養と実践、これが教祖百二十年祭への活動です。

入信の元一日の意義付け

本部の秋の大祭の後、真柱様は、立教の元一日の中山家のご様子を台にしながら、私たちの入信の元一日と比べて、いろいろと親心のほどを諭されました。

立教の元一日の中山家の事情は、一家の中心たる人々が、それぞれに身上をいただかれ、寄加持でご神意を伺われます。たすけてほしいと願われたその思いに対してのお言葉は何もなく、下ったのは、世界一れつをたすけるために天降った、みきを神のやしろに貰い受けたいというお言葉で、この仰せに対して、夫・善兵衛様は一身一家の都合を捨てて、仰せに従う旨を答えられました。これが、一番最初に示されたひながたです。

ひながたは、私たちがそれを手本として実践・実行して通るものなので、立教の元一日に教えられることが、即私たちの入信の元一日に置き換えていろいろと思案しながら、その思し召されるところを自らが実行しなければ何にもなりません。

立教の元一日を、私たちの入信の元一日に置き換えて思案しますと、たすけ一条の道具として私たちを使われる親心があって、しっかりその心を定めるようにと、身上・事情に知らされてお手引きいただいたことと思案します。

初代は如何にあったか

私たちの初代は、いろんな身上・事情に徴を見せられ、どうにもならない苦しみ・悩みの中から、たすかりたい一心で、親神様にお縋りし、おたすけを願いました。

その時初めて、親神様のお話を諄々と聞かせられ、これまでの心得違いを諭され、それを心に治めて、親神様の思召に添う心を定めて、たすけられました。

教祖から、たすけられて結構なら恩返しに人をたすけなさいと、自分のたすかったことを人に真剣に話すのだと、その方法まで解りやすく教えられて、人だすけの道を歩むようになりました。

たすけられたことのご恩報じの道としてたすけ一条の心を治めて通られたのが、私たちの先人の道です。

今日の私達は如何にあるべきか
――なぜ、にをいがけ・おたすけか

初代がならん中をたすけられたという元一日があっての、今日の私たちです。

初代がたすけられた喜びにご恩報じの道を通られ、それを代々受け継いで通られた、その人だすけの道の上に今日の自分達があるのです。

これを思うと、今日の自分が、初代の報恩の心を受け継いで、人だすけの道を歩いているかどうか思案しなければなりません。

それぞれがお道に引き寄せられた元一日を、今一度思案し直し、その心を今の私たちの心に治め直し、初代の入信の元一日の心に立ち返るということが、私は一番の急務だと申したい。

それが根本になければ、にをいがけ・おたすけだ、実践・実行だといくら言われても、力が出てこない、本当に勇みの心が湧いてこない。この辺に、もう一つ勢いを御守護いただけないモヤモヤがあるように思います。

今一度、それぞれが道に引き寄せられた元一日に立ち返り、自分の心に初代の心をしっかり治め、それを基にして、にをいがけ、おたすけに出るということが一番肝心です。

教祖にお喜びいただく一番のご恩報じは、にをいがけ・おたすけであるということは、道を信仰する者なら誰しもが分かることでしょうが、「年祭」と仕切って三年千日活動を続けている一番のもとは、そこにあるわけです。

如何なる道か――大恩を報ずる道

大恩忘れて、小恩送るようなことではならんと仰せられますが、小恩(身上・事情をたすけられたこと)を台として親神様の御守護を諄々と諭され、それに報いようとする行為は大恩を報ずる道です。

真柱様は「今日、私たち信仰する者の多くは、代を重ねている。自分自身が身上・事情をたすけられて入信した人でも、年限が立つに連れて感激が薄れる。身上・事情をたすけられて良かったというだけでなく、日々の御守護を喜び、感謝して通れるまでに成人する、丹精することが肝心だ」と仰せられますが、そうすることが、お互いが大恩を報ずる道だと思案します。

私たちは、親神様の造られた身体をお貸しいただき、天地抱き合わせの親神様の懐であるこの世界に、親神様の十全の守護をいただいて生かされています。かりものが分からないようでは何にも解からない、かしもの・かりものの教理が教えの台とお聞かせいただく所以です。

病んでみて、初めて常日頃の身上健やかにお連れ通りいただく親神様の十全の御守護の有難さに気付きますが、日々当たり前・当然のように思っているこの御守護こそ、大恩です。

人をたすけに行くことが、たすけられた親神様への一番のご恩返しだからと諭され、しっかり人だすけに励むようと促されて、大恩を報ずる道を先人達、初代は、みんな歩きました。

年限・代を重ねたら――元一日に立ち返ろう

「いんねんのたましい、神が用に使おうと思し召す者はどうしてなりと引き寄せるから、結構と思うてこれからどんな道もあるから楽しんで通るよう。用に使わねば成らんと言う道具は、痛めてでも引き寄せる。」と仰せられます。

親神様がそれぞれの魂をお見定めになり、身上や事情に徴を付け、手引きをして、引き出されたのは、急き込まれる陽気ぐらしへのたすけ一条の道具として私たちを使おうと思し召されたからだと教えられます。

真柱様は「(初代の人は)不思議なおたすけに浴し、段々に教えの理も聞き分け、成人するに連れて、親神様の守護の有難さ・教えの素晴らしさに対する確信も次第に深められた。これは初代の人々に限らず、長年信仰を続け、代を重ねた場合にも言える。三原典を何時でも手にでき、教祖のひながたについても承知していて、草創期の先人達とくらべて格段に教えに通じているはずのお互いが、成人の鈍さ故に、素直に思召に添い切れない、神一条に徹し切れない姿がある。教えを知識として解っていても本当に身に付いていない、信じ切れていない。教祖のひながたを取捨選択して、自分の都合のよいように解釈したりする。たとえ自分自身は身上・事情に迫られずとも、思召を自ら悟って行えるところにこそ、年限・代を重ねた信仰の価値がある。自らの胸の掃除につとめ、心を澄まして、私たちに求められていることを、真っ直ぐ悟り取れるように、そして、それを素直に実行できるようになってほしい。」と、仰いました。

改めて、お互いに、たすけられた元一日に立ち返り、ご恩報じの道を自分自身のものとして、しっかりたすけ一条の道を踏み行なわなければなりません。

今からでも遅くない

そう言う意味で、二年目は本当に大事な年、三年千日の心定めが成るかどうかは二年目の歩み方一つにかかっていると、年の始めに促されましたが、もう二年目も過ぎてしまいました。

今からでも遅くありません。一つ心を入れ直して、三年千日の最後の年、今よりも前へ前進した成人の姿を教祖に御覧いただき、お喜びいただけ

るような姿を、どうでもこうでも御守護いただいて、年祭の年には教祖の前へ行きたい、こんなふうに思います。

大教会長さんは、どこの教会も一人以上の初席者を心定めて通ろうと、神様に誓われました。これは年祭活動の原点です。そこを台にして大きな成人の姿を御守護いただいて教祖の前に行けるよう、踏ん張っていただきたい。共々にそれこそ命がけで歩んで、年祭の日を迎えましょう。

《以上要約》

実践項目集計（11月）

百万軒にをいがけ	64,431軒
おさづけのお取次	4,898回
身上事情お願い	842件
提出教会	120ヶ所

談話室

上下分教会の元旦祭

上下分教会　田中　勇

立教一六八年の元旦は、大晦日夜半の吹雪もやみ、美しい銀世界で迎えた。

暗い中を新雪を踏んで参拝に向う信者さん達、皆一様に喜々として明るい顔、少年会員も眠い目をこすりながら後につづく。

「おめでとうございます。」の声に参拝場はにぎやかになっていく。おつとめ準備ＯＫ。三番太鼓とともに神殿へ急ぐ。

午前六時、会長さんの手に合せて、親神様・教祖・祖霊様礼拝。祭儀式、座づとめ、おてふりと順調につとめられ前半終了。

ここで会長さんの声、「次、七・八下り目は少年会員でお願いします。」ハッピ姿で待機していた少年会員が勇んで上段へ、各々役割につく。後半開始。……毎月第一日曜日に練習していた成果がここに披露される……

なかなか自信のつかなかった子も笑顔で座についている。太鼓が得意になった子、すり鉦・小鼓も調子良くリズムにのっている、拍子木・チャンポンは各二人ずつ(内三才の女の子もいる)でにぎやか、琴・三味線・胡弓もいい音で合せている。おてふりも堂々としている、地方の子も自信をもって声を張りあげている。一手一つ、皆それぐ〳〵に真剣につとめて八下り目おわり。参拝された方々から感動と賞賛の拍手。……

折から初日の出の光が神殿に映える。

九下り目から大人に変る。

こういう形の元旦祭をつとめるようになったのは一昨年からで、「後継者の育成を」との大教会長様のお言葉を頂かれた会長さんが奥さんと相談の上、毎月一回少年会育成おつとめ練習をつとめることにされ、成果発表の場を元旦祭にされてからである。昨年は七下り目のみであったが、今年は七・八下り目と一歩前進！

元旦祭後の直会の席で少年会員達は、会長さんよりお年玉(お年玉教材)を頂いて、四月二日のおつとめ総会(笠岡)に向けて、決意を新にした。

御供のＤＮＡ

天場山分教会長　仙田公男

昨年、教会長の御命を頂いてから、賽銭箱を開けるようになりました。前会長は、月に一回か二回しか開けてなかったようですが、私は頻繁に開けるようにしています。

その理由は二つ。一つは、盗難防止の為。大教会の賽銭箱と違い、我が教会のは、片手で持てる程の重さですから。しかも神殿の玄関には鍵がありません。金目の物は置いとかないのが一番。

二つ目は、……これが重要であります。亀田山の前会長は「御供の封筒を開いてみると、その人の家庭の状況がよく分かる。」と言われました。

就任早々、生意気な事を言うようですが、私も何となく理解できます。というのは、我が教会の信者さんは少ないし、ほとんどが親戚関係ですから、元々家庭の状況はよく分かっているつもりです。

その人がまとまった額の御供をされたら、「これは、あのことのお願いだな。」と、大体想像がつくのです。しかし、封筒に記名してあれば問題ないけど、無記名だったり、裸で御供えしてあるのは困ります。だから私は頻繁に開けるのです。

日参されている方の御供なら大体分かる。そうではない人が参拝された時は、帰られたら、すぐに賽銭箱を開けてみる。裸であっても、「これはあの人の御供だな。さっき話しておられた事の御願いだな。」などと推測できます。

何も話されないのに、まとまった金額が入っていると、「どういう意味だろう。」と頭をめぐらせます。それでも分からないと、「明日お下がり持って行ってみるか。」ということになるのです。

信者さんの中には、家庭で何か身上や事情が起こっても、教会には話したがらない方もいるようです。けれど神様には縋りたいから御供はされる。そのお金にはその人の指紋が付いている。その指紋のＤＮＡを読み解くのです。

そのＤＮＡにはその人の過去から現在までの信仰態度がしっかり書き込まれているような気がします。そして、その人のこれからの運命をも暗示しているのかも知れません。そこを読み誤らないで、的確なアドバイスをする。それが教会長の仕事だと、常日頃思っています。

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌一月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「出」、選五十二句中、笠岡に繋がる教友の方二名、二句が見事選ばれ掲載されていましたので転載させて頂きます。おめでとうございます。

秀詠　川島郷分教会前会長　香取敏子

荒道を通りて出来る理のさんげ

佳詠　東悠分教会長夫人　田林美智子

出産の守護に感謝の初参り

▼病喜録のうた　東濱十三雄

歳末の　あわただしさを　感じつつ

心静めて　往診受ける

わが父 わが母

木津和分教会 松本悦朗

父の晩年は「木津和分教会二代会長」であったが、二十三年前、七十九歳で出直した。父は学問もなく、本も読む人でもなかった。しかし、どことなく存在感があり、我々兄弟の中で、口答えする者はいなかった。しようにも出来なかったと言うのが正しいだろう。大きな声を出すわけでもない、理詰めで話すわけでもないが、それでも父は、「絶対者」であった。それは、おそらく「厳にして優」を体現していたからではないだろうか。父の主なる仕事は農業であったが、毎日朝は夜明けと同時に、夜は月の明かりで、と働きつづける姿は、子供心にも正直な働き者だと思った。今でも私の脳裏に鮮明にやきついている。

父が威厳を保ち、頑固さを通せたのは、母の存在があったからこそだったと思う。不平不満をこぼさず、ただ家庭を守ることだけを楽しみに生きてきた母も十一年前に出直した。やさしかった母の写真は今でも毎日私を見守ってくれている。

絶対者であった父が生前、私に諭してくれたことがある。一ツ、職場には人より五分先に行くこと帰りは人より五分後に帰れ。二つ、酒は飲んでも呑れるな、自分は控えめで人には勧め上手である方がよい。私も間のなく古希を迎えるが、今まで人生の教訓として納得出来る諭しであったと思っている。

自分も二人の息子(ようぼく)と四人の孫を持つ身であるが、父から受けた以上の教えを時代に残すことが出来るか、と自問するこの頃であるが、「日々を感謝と報恩の心」で子供たちに信仰の道をつなぐことが、私の使命であると認識して、教祖百二十年祭を迎えさせていただきたいものである。

小走りの宅急便で 此年も
北海道の 長芋届く
何事も 我が あしきと 自覚して
振り返りつつ 今年も暮れる

▼川柳 夢

油木分教会 黒瀬修弐

行く先の夢を語れば成るふしぎ
諦めは夢を失う敗北者
老いて尚夢追う若さ道求む
先の道夢広がれば今日楽し
安眠で楽しい夢は夜開く

▼人生物語り

詩 かくしん

一、浪も嵐も　人の世の
思いかなわぬ　物語り
泣くも笑うも　胸次第
笑らって暮らそう　一日を

二、会うも別かれも　人の世の
思いかなわぬ　物語り
親から生まれた　おれだもの
父さん母さん　ありがとう

三、夜ありて昼のある　人の世の
思いかなわぬ　物語り
苦るしみの中を　たのしんで
喜ろこびの人生一代　次の世に

モスクワ サンクトペテルブルグ 演奏会に参加して②

大教会 岡本久善

荷物の積込等スムースに運び、二十七日定刻十二時に遅れること五十分、昔から古いとかボロとか聞いていたロシアの飛行機・アエロフロート五七六便、いざ乗り込むと、他の国際線の飛行機と何ら遜色ない。

離陸した飛行機は、機首を急激に上げ、上昇続け、間もなく水平飛行に移る。飛行機は一路、北方ウラジオストク方面に日本海を飛び続け、それより西に方向を変え、上空一万メートルを西へ〳〵と飛び続ける。

天候は良く雲も少なく、眼下に一面緑の山々が飛び込み、時に蛇行を繰り返すレナ川の上流域が見て取れる。真(まこと)に美しい緑の原野だ。所々高い山頂が白い帽子を冠り、冬の訪れがそこまで来ていることが分る。

この美しい風景も、共産主義崩壊より、急速な商業経済の拡大は、南米アマゾン流域の開発同様、タイガと呼ばれる巨大なる森林帯も、永久凍土の上に何千年も掛けて育った巨大な木々は、森林伐採によって斬り倒され、無惨にも地肌を剥き出し、跡に、大きな湿地や水たまりが何十何百も出来ていると聞く。

その点々とした水たまりから、何億年も掛けて凍土となった大地から、その凍土の溶けると同時に、含まれる二酸化炭素を空気中に発生、今日の人類最大の問題、温暖化を押し進めていると聞く。

そんなことを思い浮べつつ、又眠りに落ちていた。

しばらくして、夕食の準備の音と客室乗務員の声に時計を見ると、もう夕食の時刻。食べつけないパン・サラダ・ハム等をなれぬホークとナイフで平らげ、又、眠る。良く眠る。安定した気象状況が、深い眠りを与えてくれた。

成田出発から十時間、徐々に機首を下げ、降下を始めると、窓から地上の燈火が点々と見え始める。モスクワ郊外の街の灯りが拡大され、建物が確認出来ると、もう着陸していた。

現地時間午后七時(日本時間午后十一時)、それ〴〵荷物を分担し入国ゲートに向う。

少々建物内の照明が暗いのは、七年前、旧共産圏を旅して経験ある私は別に、皆んな違和感を感じているだろうと思う。我々日本人が如何に明るい照明の下に生活しているか痛感されただろう。これが、外国での大変良い経験だと思う。

その明りの下、入国ゲートに着き、荷物の検査の為、一般の人々とは別のゲートに整列、荷物と人と交互に列ぶと大層な列となる。

入国の人々が我々の荷物を横目にスイ〳〵と通り過ぎて行き、十分、二十分、三十分と、一向に検査が始まる気配がない。若い人が、ブツブツざわ〴〵とし始める。そのとき、田中さんと云う美しい女性(天理大学ロシア学科卒業・現地旅行会社勤務)が、「皆さん、此はロシアです。日本ではありません。全てがこう云う国であると認めて、もうしばらく御待ち下さい。」と説明して下さり、落ち着いて時間を過す。そのうち、芸術担当検査官がやっと来たのは、一時間を裕に過ぎたと思える頃でした。待った時間の割には、早く、荷物の中身を見ることなく通してくれる。

かくして、暗い照明の空港の外に踏み出す。日本と異なり十月末と云うのに、人々は皆オーバーのエリを立てて荷物を持って歩いている。バスの駐車場まで百メートル歩き、やっとバスに乗り込む。

現地時間の夜十時前、バスは、一路モスクワ市内に向けて、白樺の林の中を、走ること四十分位で、ホテルに到着。旧いホテルではあるが、今迄経験したことのない厳しい警備を感じさせる屈強なガードマン五人が、出入る人々を注視している。早々に部屋に二人ずつ分かれて入り、入浴を済ませて、老人の私は床につく。少々暖房が足りない感もする(毛布二枚)。

翌朝、早々に目覚めた老人二人。相棒は、名東大教会の部内会長で、私しより年は一つ若い大学の後輩である。しかし頭の髪は五年から十年先輩で、貫禄がある。

時計を見ると朝五時、ゆったりと洗面を済まし、窓の外を眺めて居ると、彼は、携帯した湯沸し器で、コーヒーを立ててくれ二人で頂いていると、私の友人(他大教会の役員の子弟で、現在実業家)石川氏が、眠れないのか訪ねて来て下さり、三人で街の散歩に出掛ける。

未だ暗い中、石川氏の案内で喫茶店に入り、日本語とヂェスチャーで、アメリカンと菓子を注文。出て来たのは、大変大きいカップのコーヒーと、それにも増すクリームパフェ。四苦八苦しながら食べ、ホテルの朝食に間に合うよう帰る。

未だ日は昇らない七時三十分、朝食を済ませて、サンクトペテルブルグに向う準備をし、ロビーに降りると、例の警備員が、厳重に目を光している。

九時、ホテルの前にバスが来ているとの事で外に出て見るが、未だ薄暗い。太陽は何時になったら昇るのかと気になる。平原の中に位置するモスクワの街に日が昇るのは、十時近くになってのことであった。やっと、北極に近いと認識すると同時に、夏の白夜が理解出来る。

かくしてモスクワの街を見学することなく、第一回の演奏地サンクトペテルブルグに移動の為、昨夜降り立ったモスクワ空港に向う。バスは郊外に出ると、白樺の林の中を走ること一時間(朝のラッシュ)位で空港に到着する。

又、機内持込に時間掛るかと思いきや、意外に早く飛行機に乗り込むことが出来る。

サンクトペテルブルグ(聖ペテロの町)は、ピョートル一世により、ロシアのヨーロッパ化政策を進める上で、新らしい首都として創られたと聞く。又、街全体が屋外美術館とも云われ、世界に二つとない街の風景は、詩の旋律を思わせると聞く。

余りロマンチストでもない私も、心の踊る思いで国内線に乗る。皆も同様、心の高まりを圧え二時間、待望の街、サンクトペテルブルグ空港に到着。

まさにヨーロッパの街並だ。

《次号に続く》

明鏡止水

おせち

新しい年のはじめ、まして三年千日最后の打止めの年明けとなりました。日は一日一日と過ぎて行くのに、心の進歩はなかなかです。

我が教会からも、おせち参拝の車が出ました。私のまだ若く現役の頃、鈍行の団参列車でいそ〳〵と参拝させて頂きました。大きな餅切りを拝見して、さすがおぢばよネェと感心したものでした。翌寒い朝、南礼拝場の広場に列をくんで並び、御神酒を戴く迄が中々で、やっと御本部の先生からおとそを頂戴して、次におせちを頂きに行くのです。空いているイスを探して、散らばって頂きました。暖い雑煮の、しかも得も云えぬ香ばしい香りに舌鼓を打って、手を暖め暖め頂いたものでした。

その頃、我が教会の古老の先生方が現存しておられて、切り餅の生(マナ)を三・四ヶ頂いて帰ってほしいと云はれました。切り餅を配っておられる学生さんに無理を云って、すばやく袋に入れ、戴いて帰りました。この古老のおばあさんは、初代で、古くからこの信仰に入られた方です。ほんとに熱心で、近所あちこちに匂いがけをして下さってゐました。お餅をありがたさ一杯の姿で拝んで頂いて下さいました。

「この餅をな、アラレに切って干して大切にしまっておくのや」、「近所に熱が出たり、お腹が痛くなられた時など、この一粒を頂いて頂くと、すぐになおるのや」、「この餅には、親神様・教祖の息がこもってゐるのやで！」と大変喜んで戴いて下さいました。

その事が事実で、大ていの方はなおられるのです。腹から信じ切ると云う事は、口では簡単ですが、それが、中々出来ないから、道は中々のびて行きません。奇跡を頂けないのです。

「初代の方々は、本当に真実だったのだなあ！」と感じ入り、「お腹の中には、只、親神様・教祖を信じる心一杯だから、この餅の一切でも御守護頂かれるのだな！」と、私は感じ入るばかりでした。

このおばあさんの匂いかけられた方が、数軒ありますが、皆、神様をおまつりして講社祭をつとめて下さっています。おまつりには、一しきり、このおばあさんの話が懐かしくはづみます。

粗衣粗食で、上手も云はず、神様の理を話して、「之を頂くとな、すぐなおるで」の言葉通りすぐに良くなるのです。昔は誠真実だったのだなあ、今日(こんにち)あたりを見廻しても、この様なえらい方は、中々お見かけいたしません。考えれば、後につゞく私達の信仰がにぶい、本気が無い、口先だけでは、神様のおはたらきを頂けないのだ。「腹からしみ〴〵と昔の方々の偉大さにつゞかなくては」と、思う今日です。

ようぼくをつくる丈が本意でなくて、人を助ける人(ようぼく)が誕生して下さる事を願って運ばせて頂かなければ、切ない教祖の御心に通じないのではないか、よくを忘れ腹を空にして一歩一歩運ばなくては、先達として教会を設立して下さった先輩の先生・古老の方々にも申し訳がないではないか!!

うどん屋をしながら、来る客にちょびり〳〵話し、又配達(近くの病院)を頼まれて一歩〳〵足を引きづりつ、つけられた道の先達が、我が教会にもいらっしゃる。この先達のあとをつゞけさせて頂く事こそ私達の任務だと、こゝに、しみじみ心深く誓はせて頂き、おせちに依せてした、めました。

(宮本 おふさ)

第７６７期修養科募集要項

＊修養科期間

立教１６８年３月１日～５月２７日

＊教　養　掛

３ヶ月間　　中　村　邦　義　（大教会役員）
１ヶ月目　　渡　邉　孝　信　（神 驛 分教会長）
２ヶ月目　　下　田　輝　夫　（神 村 分教会前会長）
３ヶ月目　　佐々木　滋　郎　（福 廣 分教会長）

＊募集要項

・志願者は、３月末日現在で満１７歳以上で、下表の必要書類を携え、上級教会を経由して大教会に順序参拝すること。
・２月２５日までに笠岡詰所に入所し、教養掛の面接を受けること。
・３ヶ月の修養期間を修了後は、大教会での修養科修了講習会を受講し、５月２９日の昼食後に解散。

＊教　科　書（必須）

『おふでさき』、『みかぐらうた』、『天理教教典』、『稿本天理教教祖伝』、『よふぼく手帳』。

＊参　考　書（出来れば持参）

『おてふり概要』、『なりもの練習譜』（笛・打楽器または三曲）、『おやしき・史跡案内』。

＊携　行　品

おつとめの扇、筆記用具、認印、笛（男鳴物の講義で笛と小鼓の内、笛を選択する人のみ）。

＊服　　装

ハッピ及び帯・バンド、長ズボン（又は、それに類するもの）、靴。

書　　類	大教会	詰所	備　　考
「順序参拝票」	○	○	
「別　席　願」	○	○	・「初席願」の順序参拝がまだの者で、修養科入学後に初席を運ぶ者のみ。 ・願書に日付を入れない事。 ・おさづけの理拝戴願の順序参拝も合せて行なう。 ・「別席の誓いの言葉」は別席の誓いの日までに覚えること。
「席　　札」		○	
「別席のしおり」	○	○	
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「おさづけの理拝戴願」	○	○	・「おさづけの理拝戴願」の順序参拝がまだの者のみ。 ・願書に日付を入れない事。
「おはなし」	○		
大教会　御供	○		
本　部　御供		○	
「修養科入学願」		○	・御供は任意であるが、慣例により、２００円以上。
「修養科入学事由書」		○	
修養科入学御供	○		
「住民票」または「戸籍抄本」		○	・「戸籍記載事項証明書」、「身分証明書」でもよい。

立教百六十七年十二月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に　会長上原理一　慎んで申し上げます

親神様の広く大きな親心溢れる御守護とお導きのままに慌ただしく月日を重ねる内に立教百六十七年もあと十日を残すのみとなりました　日頃の御高恩に御礼申し上げつつ今年一年を振り返ってみますと　教祖年祭に向かう三年千日の二年目として昨年以上に「をやの思いをにをいがけ　内治に心を配りおたすけに誠の心を尽くそう」との思いを強くし　全教会でのにをいがけおたすけ実修会や別席伏せ込みひのきしん団参等を通して三つの実践項目の実動に邁進させて頂いてまいりました　しかしながら成人を焦る気持ちからか思うようには実動に拍車がかからなかったように思います　そういう上からか今年は地震・台風・大水等月日の残念、立腹と言われる天災に見舞われた年でもありました　確かにオレオレ詐欺や幼児誘拐殺人等弱者に対してより残忍さを深めて来ている事に対してでもあると思いますが　やはりよふぼくに対する不甲斐なさも多くに関係しているように思えてなりません

そんな中にもたすけ一条の上に不思議自由の御守護をお現し下さりお連れ通り下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます　只今から今年一年賜りました御守護お導きを改めて御礼申し上げさせて頂きたいと年末の慌ただしさを厭いませず寄り集いました道の子供達のお歌の唱和と相共におつとめ奉仕者一同　喜び勇んで座りづとめてをどりをつとめて十二月の月次祭を執り行わせて頂きます　皆の真実の状を御覧下さいまして　親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は世話人の島村廣義先生にお越し頂いております教祖年祭に向けての成人の歩みが出来るのは後一年しかありません　その一年の通り方の指針としておぢばの声を聞かせて頂く所存でございます　その上で今年一年を振り返り我が心使いや行いを真摯に反省し　至らぬ処は改め　良き処は更に伸ばすべく来るべき一年に向け新たな気持ちで成人を誓い合い全教会で一名以上の初席者を御守護頂けるよう　にをいがけ、おたすけの上に勤め切らせて頂く覚悟でございます

何卒親神様には旬々にお聞かせ頂く親の声を頼りに　届かぬながらも精一杯に成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り一人でも多くの人の心を澄み切らせて頂いて　明るく楽しく喜びに満ち溢れた年末年始を迎えさせて頂けますようお導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

◈立教168年　教会長講習会

【日　　時】　２月２６日　午後１時半 受付、２時 開講
　　２７日　正午 閉講
【場　　所】　笠岡詰所
【講　　師】　本部員･表統領　　飯　降　政　彦　先生、　他　外部講師１名
【内　　容】　大教会長様挨拶
講話①(飯降先生)
講話②(外部講師)
ねりあい(３～４時間)
【対　　象】　教 会 長
【受講お供】　３，０００円（受付で頂きます）

＊身上等でやむなく欠席の場合は、必ず大教会長様に理由を連絡して頂くようお願い致します。

◈学生層育成者講習会

【日　　時】　２月２１日（月）大教会月次祭おつとめ終了後
【場　　所】　大教会神殿
【講　　師】　深　谷　徳　重　先生（学生生徒修養会部部長・中野大教会長）
【対　　象】　教会長、先達、よふぼく

◈にをいがけ・おたすけ実修会　要員研修会

【日　　時】　３月２０日　午後０時４０分 受付、１時 開講、５時 閉講
【場　　所】　笠岡大教会　講堂
【講　　師】　大教会長様
【内　　容】　講義「別席について」、にをいがけ実修（ドリル）
【対　　象】　実修会要員
【服　　装】　ハッピ着用

◈立教168年　春の学生おぢばがえり

【趣　　旨】　道につながる学生が、一人でも多くの友とおぢばに帰り集い、真柱様のお言葉を心に治め、教祖120年祭に向けて、今後の成人を誓い合う。
【テ ー マ】　友とおぢばへ　～ １万人への決意を ～
【期　　日】　立教168年（平成17年）３月２８日（月）
【内　　容】　・式　　典 …… 午前　９時　（本部中庭）
「真柱様お言葉」
・直属アワー …… 午前１１時　（笠岡詰所）
・別　　席 …… 正午より受付
・後夜祭『春まつり』　… 夕つとめ後　（東西泉水プール前広場）
【参加対象】　高校生（新１年生を含む）、大学生、短大生、大学院生、専門学校生など
＊各教区で、団参を計画しているので、それをご利用の上、ご参加ください。
尚、ご不明な点、お問い合わせは、笠岡 学生担当委員会 吉岡まで。

◈鼓笛バンド講習会

【日　　時】　３月３１日（木）～４月２日（土）２泊３日
【内　　容】　お供え演奏曲の練習･修得、
お楽しみ行事（室内オリンピック等）
＊４月２日は、少年会おつとめ総会へも参加します。

◈少年会笠岡団　おつとめまなび総会

【日　　時】　平成１７年４月２日（土）午前９時受付、９時半開会、午後３時閉会
【内　　容】　午前　おつとめまなび、総会式典、若木門出式
午後　お楽しみ行事（ゲーム、スーパーボールすくい他）
【参加御供】　各隊　１，０００円
【服　　装】　ハッピ、学校のズボン･スカート、白い靴下、なお祭儀式をつとめる人はおつとめ衣。
◎各隊からの少年会員が日頃のおつとめまなびの成果を、親神さま･おやさまにご覧頂く年に一度の総会です。大勢の参加をお待ちしております。
会長さん･奥さん、この機会に「教会おとまり会」などで少年会員におつとめの大切さを教え、おつとめの練習をよろしくお願い致します。

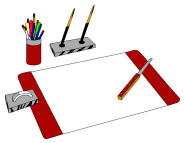
◈各行事に参加ご希望の方は、各ブロックの担当者にお申し込みください

・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、
③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
俳句等は１句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。



郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７
ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４
尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

訂正とお詫び

立教167年12月21日発行の『かさおか』第43巻第12号 第12頁 **訃報** の村川ハツヱ姉の立場は、「大江橋分教会三代会長」ではなく、「三代会長夫人」の誤りでした。
ここに訂正し、謹んでお詫びを申し上げます。

名言&迷言

昨年の夏、息子二人と自転車でのおばがえりを敢行しました。月日の流れは早いもので、初めての自転車おぢばがえりは九年前、当時小六だった長男を連れほとんど児童虐待状態で帰えったのを思い出します。次男も何とか連れて帰えってやりたいと思いつづけ、昨年八月八日実現しました。早朝、二十歳の長男と中二の二男を連れ？自教会を出発、最初の峠越えで早くもチェーンが切れるというアクシデント！もう止めろと神様が言われているのかもしれないという思いが頭を過ぎる中イヤイヤ、止める理由は次々と浮かぶがこれで止めていたのでは前には進めないぞ、と思い返えして知人に代車を借りて再び出発。例年にない猛暑の中、九年前とは少々違い、
♪〝父さんについてこいって言うじゃない～〟
〝でもあんた、連れていくどころか、連れられてますから～〟〝残念！〟
（ギター侍風に！）
なんて状態で、何度かくじけそうになりながら、結局二十八時間走りつづけ姫路の健康ランドにたどり着き仮眠を取る事に、夕方迄休憩、再び走り出し、又、又、夜中走りつづけ明け方大阪の女房の里の教会へ到着、仮眠を取らせて貰い夕方出発。瓢箪山から十三峠の側道を登り、こかん様の碑を参拝させて頂き一路おぢばへ、深夜三時すぎやっとおぢば到着！身上の方のお願いを込めおつとめをさせて頂く中、こうして息子二人と、何と幸せな事と涙が出て久々の感動でした。はたして息子達は？ まぁ、何にしても〝仕上げの年もスタート〟悔の残らない様、〝よいしょ、よいしょ〟と一歩一歩、心に胡座をかかない人になれと息子達にも、自分にも、少しでも、〈！（と）